

「おそいですね、慎先生」

結婚式当日。いつもより少し早起きし、着慣れない背広を着て普段は乗らない電車に乗って待ち合わせ場所の、港近くの駅に淳はいた。

そこには淳のほかには雄二や優希、春菜と縁がいたが、淳たちを誘った本人たる慎はいなかった。

「どこで道草食ってるんすかねえ」

雄二のぼやきに、「うーん、いつもなら5分でも遅れそうなきは連絡くれるのになあ」と優希は時計に目をやるのだった。

「そろそろ、行かないとまずいんじゃない？」

縁は腕時計を右手の人差し指で軽く二回たたく。

「それに、彼ももう子供じゃないんだから、一人で行けるでしょ」

「そうだね。別に方向音痴ってわけでもないんだし」

縁の言葉に優希はうなずき、春菜に念のためともう一度だけ「慎のこと、何も聞いてないんだよね」と聞く。コクリと

春菜がうなずくのを確認して、優希は「よし、じゃあ僕らは先に行つてようか」とみんなを先導した。

「どうしたんだろう。慎先生」

優希の後についていきながら、しかし淳は後ろ髪を引つ張られるようないやな思いであった。

そんな感情も、実際に港につくとすぐに忘れた。

「うわ、すごい！」

さすがは豪華客船といったところか。大きさ、装飾の派手さ、のっている人の数やその人たちの着ている衣服。その他もろもろ、すべてが豪華という言葉でも足りないほどにすばらしいものであった。

「白藤がここにいても、なんか違和感ねえよな」

雄二のそのつぶやきに、確かにいつも高貴な雰囲気をかもし出している白藤に似合いそうだと「そうだね」と淳もうなずき、「でもやっぱり和服で来るのかな、聡介さん」と冗談をこぼした。雄二はこの冗談が気に入ったのか、「ははは、

確かにあの人なら、空気とかマナーとか読まないで和服で来そうだ」と軽く笑った。

「ほら、君たち。行くよ」

優希は豪華客船の入り口付近から淳たちに手を振る。

「あの、ちよつと待っててもらってもいいですか？ 今、雄二と写真を撮ってきます」

「ああ、でもすぐ来てね」

淳は近くにいる春菜に親から借りてきたデジカメをわたし、雄二とのツーショットを撮ってもらった。

「ありがとうございます」

大きく淳は頭を下げる。春菜は、「あ、いえ」とそんな淳に少しあたふたして、そして「はい、これ」とデジカメを返した。すると縁が、「ちよつと待った」とそのデジカメを淳より先にひよいと受け取り、「せっかくだから、みんなで一枚とりましょうよ」と提案した。淳も雄二もうなずいたのを確認すると、縁は「ほら、優希。早く来なさい」と優希に手招きした。

「え？」

こちらの話が聞こえていなかった優希は、だから頭にはてなマークを浮かべてあつけにとられるのだった。

「あ、ようやく目が覚めましたね」

慎がようやく意識を取り戻し、ゆっくりとまぶたを開けると、その瞳に写った光景は昨晚入ったはずのコンテナの中ではなく、医務室のような場所であった。

そこには慎以外に三人の人間がおり、二人はドアの近くで後ろで腕を組んでいる、黒いスーツに黒いサングラスをかけた強面で、もう一人は慎のそばで彼が目を覚ますと彼の顔を覗き込んできた、長い金色の髪を持ち白いドレスを身にまとっていた美女であった。

「あ、ああ、フィーか」

慎はすぐにそれが今回の結婚式の主役の一人、新婦のフィグネリアだと認識し、だからこそ疑問が浮かんだ。

「どうしてお前がここに？　というか、ここどこだ？」

慎はあたりを見回そうとゆっくりと体を持ち上げる。しか

し、いつもより重い体はなかなか立ち上がってはくれなかった。

「無理なさらないほうが……」

そんな慎の様子を見て、フィグネリアは心配する。だが慎は要らぬ世話だと手を軽く振り、「いや、大丈夫だ。傷はもうないはず……」と断った。

「それよりも、ここはどこだ？」

慎はようやく体が立ち上がった体を、少しずつほぐしながら改めて聞く。ちらりと腕時計を覗いて見ると、時間はとうに淳たちとの待ち合わせの時刻を過ぎていた。

「ここは『クイーンズ・メアリー号』の医務室です」

「は？」

しかし帰ってきたのはあまりにも予想外すぎる答えで、慎は理解ができなかった。

「ですから、ここは今日、私と司の結婚式を行う『クイーンズ・メアリー号』の医務室です」

「は？」

「ですから！」

フィグネリアが強そうというと、慎は「いや、それはもう分かったよ。ありがとう。でも、何で俺がそんな場所に？」と眉間にしわを寄せ、納得が行かないといった顔持ちで聞く。フィグネリアは得心いったと「ああ」とうなずき、

「今日、この船で使われる食料などをコンテナから輸送しているときに、偶然、貴方が入っているのを見つけて急いでここに運んでもらったのです」

と説明した。

「は？」

慎は何度目のかの同じリアクションを取り、そして「そんな、偶然……」と運命の数奇に驚愕した。

『は？』じゃありませんよ。私たちだってびっくりしたんですから。何で貴方がこんなところにつて。でも、見たところ服に大きく血のあとが残っていましたし、実際コンテナの中にも血がたれていました。ですから、急いで医務室に運んで、そしてお医者様に見てもらったんです」

「そうか、なるほど。それはありがとうな」

「いえ、別に」

そして慎は少しの間考え込む。すると「はっ」とあることに気がつき、「そういえば、あのあたりに他に誰かいなかったか？」とあわてて聞く。

「誰か？」

フィグネリアは首をかしげると、後ろにいたボディーガードに「いましたっけ」とたずねる。しかしボディーガードは首を振り「いえ、いませんでしたよ」と否定を表した。

「わたくしも見ておりません。……。何か、あったのでしょうか？」

フィグネリアの問いに、新は深刻な顔持ちになり「ああ」とうなずき、「実は」と今はもうない腹の傷を押えながら、昨晚のことを語り始めるのだった。

「しかし、なんだよ、『クイーンズ・メリー・何とか号』って。『クイーンズ・メアリー号』じゃねえか！」

船の中に入り、結婚式の開始時間を今か今かと待ちわびる雄二は、そういえば慎が言っていた船の名前が間違っていた

ことを思い出し、そう愚痴る。

「おれ、お袋にそういつちやったよ。帰ったら笑いものだよ」
淳はそんな雄二の話を話半分に聞きながら改めて辺りを見回す。

そこにいる人々はやはり全員気品があり、落ち着いている。中にはどこか無理に作り笑いをしているらしい人も見受けられたが、ほとんどの人が幸せそうな顔をしていた。

優希の話を聞くに、新婦はロシアのある大きな油田を持つ家系のお嬢様らしい。もともと大財閥だったが、油田を掘り当てて、さらに発展したとの事だ。だから、ここに招待されている人々も皆、世界有数の超大物クラスのVIPやその使用人であるらしい。

だが、淳が本当に驚いたのは、その人数だった。さすが豪華客船だけあり、船内はかなりの大きさを誇ってはいたが、それでも所狭しと、かなり多くの人がいた。それら全員がVIPであることを考えると、自分がいかに場違いかわかる。「でも、せっかく来たんだし、楽しもう」

淳がうん、とうなずくと、「それでは、これより結婚式を

始めます」と英語でスピーチが流れた。

結婚式が始まってしまえば、時がたつのはあつという間だった。結婚式が面白かった、というわけではない。むしろ、スピーチなどをはじめとして、式中使われているのは英語だけであり、淳はいくつかの単語を拾い、かろうじて意味を把握していただけで、それでも完全には意味は取れていなかった。

だから、彼が心引かれたのは、運ばれてくる料理だった。白藤の別荘でもほっぺたが落ちるほどにおいしい食べ物を口にしてはいたが、これはそれとはまた違った方向のおいしさを持っていた。

「わあ、おいしいなあ」

そんな淳の傍ら、雄二は会場にいるゲストや使用人などの美女に目を奪われ、ウォッチハンティングしていた。

式が終わり、デザートも食べ終わった淳たちの元に、新郎新婦がやってくる。

「ごきげんよう、皆さん」

新郎は顔立ちが整っており、いわゆるイケメンという風貌

であったが、顔つきが険しく、近寄りがたい雰囲気を放っていた。

反対に新婦は非常に優しい笑顔をしており、見ているこちらの心を和ませてくれた。

「うん、久しぶりだね」

優希はそんな新郎新婦に挨拶を交わす。新郎には「君も、相変わらずだね」という言葉を添えて。新郎は優希のそんな言葉に「フン」と顔を背けてそっぽを向いた。優希は肩をすくめると、そういえばと「ひよっとして、だけど。慎がどこにいるか知ってる？」と本来ならばこちらが聞かれるはずの言葉を口にした。しかし以外にも帰ってきたのは、「ああ。あいつならさつき会った。急いでトイレに向かったみたいだから、そこまで多く話していないがな」というものだった。

「へえ、そっか。彼、もう来てたのか」

「ああ。諸事情があってお前たちといっしょにこれれなくなったらしい。お前たちにあったら、すまなかったと伝えてくれと頼まれた」

優希と新郎が話している最中、新婦は「あ、貴方たちが淳

君と雄二君ね」と二人に話しかけてきた。

「はじめまして。わたくし、ファイグネリアと申します。貴方たちのことはよく慎や優希に聞いていて、ずっと会いたいと思っていたの」

「あ、はい。はじめまして。このたびは及び頂、まことにありがとうございます」

おもわずどきまぎしながら淳は挨拶すると、「そんな堅苦しくならないで」とファイグネリアは苦笑した。

「貴方たち、あの気高き純白に挑んだんですってね」

「……。はい」

淳としてはそれは敗戦の記憶で、できれば思い出したくないものであったので、返事の声は少し暗くなる。そんな彼の心情を察してか、「負けはしたけど、貴方たちには勇気がある。それってとっても大事なことよ」とファイグネリアは言葉にした。

勇気、か。

淳がその言葉を反復していると、ファイグネリアは「ねえ。もしよかったらでいいんだけど、そのときのこと、私に聞か

せてくれないかしら？」と楽しそうに手をぱちんと打った。その様子はまるで子供のようであり、彼女が大人の気品や冷静さと子供のすべてを楽しむ明るさという両方を兼ね備えるということを現していた。

淳は「はい、いいですよ」と返事を返す。しかし、新郎たる司の「そろそろ、行かないとまずい」という言葉にフィグネリアは「あ、そうね。他のところもご挨拶回りしなくちゃ」とうなずいた。

「ごめんなさいね。でももしよかったら、後でゆっくり聞かせてくれるとうれしいわ」

「わかりました」

「まあ。ありがとう。じゃあね」

新婦はにこやかに手を振ってその場を去る。その笑顔はとても綺麗であり、見ているこちらの気持ちも幸せになった。

新郎は新郎で相変わらず表情を崩さなかったが、他のグループに言った瞬間にさわやかな顔で笑っていた。

「相変わらず、仮面の使い分けがうまいなあ。司は」

優希のぼそりとつぶやいた言葉に、淳は「え、あれ演技な

んですか」とこちらも小さな声で聞いた。

「うん。そうだよ。彼の人生もいろいろあったからね。ああやってしたくもない愛想笑いをしなくちゃならない場面も結構あったんだよ」

司の本当にさわやかな笑顔に、淳はその言葉を一概に信じられなかったが、彼の親友が言うのだから間違いはないと納得し、いろいろな人がいるんだなと実感した。

すると、余所見をしていた淳に「と、すみません」と黒いスーツを着た新郎新婦のボディガードがぶつかかった。会場にいる人間はさすがはVIPということもあり、ほとんどの人が近くにお付のボディガードらしき人を連れていた。当然、新郎新婦も例外ではなかった。

「あれ、今の声、どこかで聞いたことあるような」

淳は引っかけりを感じ、少し記憶を探ってみるが、なかなかヒットしなかった。しかし雄二の顔を見た瞬間、そのことはわすれて、「あ、そういえば雄二。君にしては珍しいね。

あんなに美人な人が来たのに」と声をかける。だが雄二は「さすがに人妻には手をださねえよ」とあたりの美女を見回し、

うっとりしながら説得力を感じない言葉を口にしていた。

バチン

突如、照明が落ちた。とっさのことで、淳は非常に驚き、あたりを見回す。目が慣れるの時間がかかったが、少し慣れてきた目で彼は、とんでもないものを目撃してしまった。

覆面をかぶった大柄な男が、ファイグネリアの口にハンカチを当てるとファイグネリアは「う」と一瞬にして意識を失い、ぱたりとたおれかけてしまう。これを男はキャッチし、抱きかかえて連れて行こうとしていたのだ。

「あ、待て！」

これを偶然、間近で目撃することのできた淳は急いで覆面の後を追った。

だがしかし、淳は気づいてはいなかったが同様なことがそこかしこでおきていた。

「なんだ、これは！」

部屋の中で怒号が響き、あたりはシンとし静まる。そして

その一瞬の間の後に、その部屋にいるほとんどの人は、パニックに陥った。

優希や各要人のボディガードも淳に一瞬遅れて、暗闇にようやく慣れてきた目で事を確認し、急いで覆面をおった。しかし、覆面たちが会場の大きなドアから出て行った後、彼らも当然ドアを開けてこれに続こうとしたが、ドアはピクリともしなかった。

そのため、結果的に会場の外にでられたのは覆面たちと同じタイミングで外に出ることができた淳と、事件が起きてすぐにすさまじい速さで外に出て行ったボディガードの二人だけであった。

優希はドアが開かないことを実際に自分で確かめ、

「まさか、能力者か」

と瞬時にと考える。そして「皆さん、どいてください」と指示した後、能力で自身の右腕に重力を最大限集め、そして扉を殴った。

重力によって強化されかなりの質量を持った右腕は、故に相当なエネルギーを扉にあたえ、ドン、と大きな衝撃音と

もに扉は碎け散った。

だがもはや遅し。

もうその向こう側の広い廊下には覆面たちの姿はこれっぽっちも見つからなかった。

「ち、やられた」

駆けつけた司が優希の隣に立ち、舌打ちをする。優希も「うん、なんて電撃作戦だ」とこれにうなづく。

「手分けして探すぞ！」

と司は優希に言い、そして彼のボディガードに「相手はプロだ。ここは俺たちに任せて、お前たちは会場のパニックを納めろ」と命令すると、目にもとまらぬ速さで駆け抜けた。

淳は覆面たちの後を必死で追いかけた。淳の体力はそれほどでもなかったが、人を担いでいるからか、覆面たちのスピードはそれほど速くはなかった。それでも、淳は追いつけず、着いていくのがやっとであった。

少しすると覆面の内の一人、大柄な男が「ねずみが一匹着

いてきている。お前たちは先に行け」とそこへ立ち止まった。そして淳が正面を通り過ぎようとした瞬間、彼を思い切り殴りつけた。すんでのところでこれを淳は右に交わし、しかし本当にぎりぎりであったから、体勢がくずれ転んでしまう。それをかばう意味と体勢を立て直すという両方の意味で、淳はクルリと一回転した。男はそこへけりを入れるがこれも何とか間一髪で後ろに大きく飛びのくことで避けた淳だが、そのせいで開いていたドアをくぐり、ある一つの部屋の中に入ってしまったことに気がついた。そこはどうかやら広い物置のようで、机やら椅子やらよく分からない箱やらがそこかしこに置かれていた。いや、物置というよりはその広さから、倉庫を思い出す。

倉庫という言葉を思いかけた瞬間、淳は心のどこかがひどく暗くなることに気がついたが、今はそんな事を考えている場合ではないと、現状把握に努めた。

「しまったな」

そして淳は気がつく。その部屋には扉は一つしかなく、そうなるらと覆面たちを追うためには入ってきたドアから行か

なければならぬ。しかしそこには先ほど淳に殴りかかった大柄の男がいた。なるほど、つまりはこの大柄の男の思惑には待ってしまったようだ。

「だったら」

淳はすぐに辺りを見回し、水を探す。すると場所がよかつたからか、すぐに2リットル入りのペットボトルを見つけ、そしてそれを能力で自身のほうに飛ばすとこれをキャッチし、ふたを開封した。

ふたの開いたペットボトルを淳は前へ思い切り投げる。するとペットボトルの中から、水が勢いよく男のほうへ飛んでいった。

淳は攻撃と同時に、他のペットボトルも自身の近くまで飛ばし、同様にふたを空けると前へ投げた。そして男に向かって思い切りペットボトルの中から開放された水を飛ばすのだった。

何度も何度も繰り返し、男に向かって水を飛ばす。

しかし、淳は同時に奇妙な感覚にとらわれていた。

本来、自分の手足と同様に体の一部のようなものであるは

ずの水は。

まるで淳という存在を忘れてしまったとでもいうかのよう……。

ズキリ

突如、頭の奥底に大きな痛みが走る。あまりの頭痛の大きさに、淳は思わず一瞬、頭が真っ白になり、右手で頭を押えた。

「なんなんだ、この感覚」

右手が邪魔をされていて右の目では見えなかったが、しかしふさがっていない左の目で淳は信じられない光景を目にした。

彼の操っていた水がすべて。

男の前で、まるで意思を持って、男を傷つけることを嫌がるかのように

彼の前で、静止していた。

「え……。何で？」

淳には理解ができなかった。

一体今何が起きているのか。

一体今自分は何を目撃しているのか。

一体、これから何が起きようとしているのか。

「本当の恐怖を教えてやろう」

ビクリ

体の奥が震える。

そうだ、僕は知っている。

この感覚を。

怖い

この男の放つ気を僕は知っている。

怖い

そうだ、どうして忘れていたんだろう。

これはあの時とおんなじ……

怖い！

「ぐっ」

本来淳が操っていたはずの水が、淳を襲う。淳が今まで出した水すべてが彼をめがけて飛んでくる。理解ができなかった淳は行動もできず、もろにこれを喰らう。淳は大きく吹き飛ばされ、腹を抱えて咳き込む。だがしかし水はそれを待つてはくれなかった。

吹き飛ばされた淳をめがけ、今度は上から降ってくる。

「ひ」

避けることも受身を取ることも、もはや空っぽになった淳の頭では何をすることもできず、ただただ巨大な水の固まりに飲み込まれるだけであった。

「ごほ、ごほごほ」

圧倒的圧力にさいなまれ、淳の口からは血が出ていた。内蔵がやられたのか。それとも単に唇を切っただけなのか。

だが淳にとってそんな事は関係がなかった。

怖い

今度は水がいくつもの方向から飛んできた。

「もう……。やめてよ」

淳の心は泣き叫ぶ。だがそんな祈りはまるで届かず、淳の味方たるはずの水は、淳の一部たるはずの水は、ただの暴力と化して淳を襲った。

いたい

いたいよ

こわい

もういやだ

こわい

怖い

怖い

怖い怖い怖い

怖い怖い怖い怖い怖い

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い怖い

「あ、ああ」

そうだ。ようやくわかった。

この頭痛の正体。これはあの男から発する……

殺気を感じているからだ。

そうだ、僕は以前、この恐ろしい気を経験していた……。

怖い、怖い怖い、怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

どうして今まで忘れていたのだろうか

あんなに恐ろしい経験だったのに

いや、だからこそ忘れていたんだろう

そしてその悪意をのせた水も同様に巨大な力を持ち、渾に襲い掛かった。

それはもはや、人の耐えられるものではなく。

だがもはや正常に働かない渾の頭では戦うどころか逃げ出すということすらできず。

そして襲ってくる水に

飲み込まれた。

「僕は……」

弱い